

東日本大震災を乗り越え 地域資源を取り入れた世界初のジーンズをつくるまで 〜日本の新しい希望〜

有限会社オйкаワデニム(気仙沼市) 代表取締役社長

おいかわ ひでこ
及川 秀子 氏



【プロフィール】
1946年10月10日 新潟県三島郡出雲崎町生まれ。1981年オйкаワデニム専務取締役となり、1991年同代表取締役社長に就任した。ジーンズの有名ブランドのOEM(※)を中心とした事業から、技術を強みに自社ブランドを立ち上げる。夫との死別、バブル崩壊、東日本大震災と幾多の困難を乗り越え、宮城県気仙沼市で事業を続ける。
※OEM…発注元のブランドで販売される製品を請け負って製造すること。

これは3月2日に行われた当所女性会「女性経営者公開講演会」での講演の内容を要約したものです。

経済情勢の変化に 飲み込まれない体制整備

弊社はデニムという商材に特化した縫製工場です。そして、長年培った知識と技術、経験を生かして、ときには生地を企画したり、またあるときにはお客さまであるメーカーとブランドコンビネーションから一緒に考え新製品の開発も行うという、単に縫製技術を提供するだけではない、独特のスタイルでも営業しています。

これまで、私は会社存続の危機に2回直面しています。1度目は25年前、先代である夫が亡くなったときです。3人いる息子のうち、2人はまだ高校生でした。親としては子どもたちを一人前に育て上げることが使命だと思っていましたので、仕事をやらなければならぬ、働く仲間たちも守らなければならぬ、そう思うと踏ん張ることができ、何とかその危機を乗り越えることができました。

そして2度目の危機。これは、弊社の経営環境にあったと思います。それまで当社は、5会社のグループにより日産約6000本というキャパシティで生産を行っており、その工場の中の一つでした。ところが平成9年から10年、バブルが崩壊。私たちの仕事は、賃金の安い海外に奪われていったのです。あのころは日給が4200円ほどでしたが、海外では80円から120円程度。逆立ちしてもかなうものではありませんでした。しかし、そのとき見に行った海外の現場で気づいたことがあります。それは、日本の女性の指先の動きが一番美しいということ。このとき、メイドインジャパンを確立して、経済情勢が変化しようとも、それに飲み込まれない体制を整えたいと思いました。

ところが仕事はなくなり、1人辞め、2人辞め、日を追うごとに社員がいなくなりました。残った社員は「今日こそ仕事があるのではないか」と毎日来てくれました。本当に申し訳なかったです。正直に申しますと、そのときは何も考えることができなかったというのが本音でした。ですが、生地や糸、ミシ



津波の後に見つかったデニムは1本の糸のほつれもなかった。

ン、そして時間だけはたくさんありましたので、社員に1つの指示を出しました。「裁断から仕上げまでを自分一人でやってみてください」と。息子たちには、自分がほしいと思うデニムをつくらせました。この行動は新しい発想を生み出し、それによって弊社にユニークなアイデアが蓄積されることになりました。そして、営業というものにもチャレンジしました。担当したのは、幼いときから冒険心が旺盛な次男です。最初は門前払いされることもありましたが、オファーはどんどん増えました。長男はどんなものでもミシンの上で形にしてくれました。三男は機械のメンテナンスをしてくれました。

オリジナルブランドで 下請けから脱却

このような経験から、私はある考えを持つようになりました。いまから15年ほど前、私は息子たちに大きなテーマを与えました。それが「下請けからの脱却」です。オリジナルブランドを立ち上げ、どんな経済の波が押し寄せても、その影響を受けない方向に転換を図ったのです。その象徴がオリジナルブランド「スタジオゼロ」。何もないうところから始まる、何もなかったときにみんなで考えた知恵を結集させるという意味が込められています。そして、オйкаワデニムの頭文字の「O」を取りました。

デニムというのは、綿に綿の糸をのせてつくるのが常識ですが、私たちは世界で初めて麻糸を綿にのせることに成功しました。麻は強い素材ですので強い製品ができました。国内だとOE

Mの供給先と同じ土俵に上がることになってしまったので、海外での展開を考えました。そこで最初に展示会を行ったフランス、イタリア、スウェーデンで、「こんなに強いデニムは初めてだ。素晴らしい」という高い評価をいただき、ロシアやヨーロッパ各国からもオファーをいただくことができました。

一方そのころ、国内ではジーンズにも価格破壊が起こっていました。1000円未満のデニムが量販店に並ぶという、業界最安値時代の到来です。国内の材料を使い、賃金を払うとなると、到底この価格で作ることはできません。しかしこのとき、OEM供給先の方がやってきて「絶対にまたメイドインジャパンを盛り返します。その間のようなことでも協力するので工場をつないでほしい」とおっしゃいました。そこで、自信を持ってつくった「スタジオゼロ」を国内でも発表しました。価格破壊がチャンスになったのです。

地域資源を活用した メイドインジャパン

2011年3月11日、東日本大震災で、20mの波がこの地域を襲いました。我が家も事務所も倉庫も全て流され、土台だけになりましたが、従業員、家族、1人も犠牲者が出ませんでした。高台にあった工場には命がけで避難して来られた地域の人たちも集まっており、工場は民間避難所の第1号として、150人の命を守りました。



新技術により、これまで捨てられていたカジキマグロの吻(角)を使った生地の開発に成功。

工場はたくさんの方々のご協力を得て、4月4日から再開しました。同時に、息子にはハローワークに求人を出すように指示しました。当時の気仙沼では4000人もの人が職を失っていました。募集人員は無制限、前の職場に戻ることができるようになったら、そちらに戻っても良いということ

で、入社したその日から正社員として採用させていただきました。「復興10年」と考えたときに、これからの2年、3年、会社が残って仕事がある私たちには、この投資はいつか絶対挽回できると思ったからです。津波で5000本のジーンズが流され、そのうち40本ほどが倉庫で見つかったのですが、泥まみれになっても、1本も、糸のほつれも型崩れもなかったのは、大変な自

信になりました。

そして、誰もがこの土地と真剣に向き合っていたまだからこそ、発信できるものがあるのではないかと思ひ至り、地域資源を活用した新ブランドを創設しました。事業のテーマは「漁師町から生まれるファッション」です。震災後に生き残った我々が、真っ白なキャンパスに復興の色をつけていくという思いを込め、ブランド名を「SHIRO」と命名しました。震災当時、それまでは知らなかった海の話を、ろうそくの明かり一本のもとに集まった漁師さんたちからたくさん伺いました。そのお話からヒントを得て、それまで地元では当たり前のように捨てられていたサメの皮やアワビの貝殻、漁網など、それらを再加工してバッグをつくりました。また、津波に流され、発見された大漁旗も復興のシンボルとして活用しました。さらに、新素材の開発にも取り組みました。カジキマグロの吻、角とも言いますが、試行錯誤の末、独自の技術により、これで生地をつくることに成功しました。水生動物を用いた生地の開発は、繊維業界でも初めてのことだと思ひます。これはカジキマグロの年間漁獲高が最も高い気仙沼だからできることだと思ひます。そのデニムは40%がカジキマグロの吻で60%が綿です。去年の11月15日から発売しましたが、スベスベの手ざわりに予想を超えるオファーをいただきました。本当にありがたいことです。

3つの命を 大切にしていきたい

震災を体験した私は、これからは3つの「命」を大切にしていきたいと思っています。1つ目は先祖から、親からいただいた自分自身のたった一つの大切な「命」です。2つ目は2011年3月11日のことを後世に伝えていく使命の「命」。それが今後予測できない災害の備えとなり、国内外からいただいたご支援に対する恩返しの一つともなるのではないかと思います。そして3つ目の「命」は、「一生懸命の「命」」です。この仕事に命をかけ、日本女性の指先から生まれる製品の端正さ、美しさに自信をもち、一針一針に命を込め、世界に通用する製品づくりを心がけていこうと思ひます。

本日の演題である「日本の希望」。それは、本日お集まりのお一人おひとりの女性の力だと思ひます。私もその一人として、これからもがんばってまいります。

【概要】 有限会社オйкаワデニム

代 者：代表取締役社長
及川 秀子
設 立：1981年
出 資 金：500万円
事業内容：デニム衣類の企画、
製造、販売
従業員数：23人
所 在 地：気仙沼市本吉町蔵内83-1
TEL. 0226-42-3911